

和らいだ風が頬を伝わり、麗らかな春の香りを感じる季節となりました。

本日は、新型コロナウイルス感染症の収束が待たれる中、様々なご高配を賜り、私たち102名の門出に対してこのような式典を挙げて頂き、誠にありがとうございます。

4年前の入学式、「3月の卒業式では先輩方の華やかな袴姿が、まるで花の咲いたようだった。今の皆さんは黒いスーツを身にまとい、種を植えたばかりの花壇のようで、これから花を咲かせていくと思うと希望がある。」という祝辞を頂きました。この言葉は看護の道を歩み始めたことへの実感となり、これから始まる大学生活への期待の高まりと、看護専門職者になるという思いを確固たるものにしたことが思い起こされます。

1年次、ナイチンゲールの著書「看護覚え書」を読んだ際は、内容の奥深さに直面し、自分が看護を提供できるのだろうか戸惑いや不安さえも感じました。また、人間の根本的な理解に向けて、生命の歴史や生命環境として宇宙や地球を捉えることに驚いたことを覚えています。

2年次からは専門的な科目と、その専門性につながる、身体や精神、社会の内部構造について学修する科目が増えました。看護技術の修得を目指し、放課後、夕日が沈みかけ空がオレンジから紫に染まる中、友人と納得いくまで練習を重ねたあの日々は、紛れもない青春でした。

3年次には新型コロナウイルス感染症の第3波の到来が予測される中、半年間の実習を迎えました。先の見えない日々が続き、オンライン実習への変更に対する困惑や臨地での経験が十分でないことへの不安もありました。しかし、オンライン実習だからこそ、メンバー間で同じ対象の方を受け持ち、その方の理解を深めるために活発なディスカッションを重ねたことで、多角的な視点から看護過程を展開する力をつけることができました。

集大成となる4年次の実習も限られた環境ではありましたが、これまでの学修や経験を統合させ、自身のもてる力を最大限に発揮しながら、対象の方とかわることができました。このかわりを通して、私自身、看護とは「生活過程をふまえて健康状態を捉え、心に寄り添い、もてる力を見出し、個別性を尊重し、家族や地域の中で暮らすこれからの生活をともに考え続け、生命力を高めること」であると考えようになりました。

こうして振り返ると瞬く間に大学での時間は過ぎていきました。4年前の入学式では、大学生活の約半分を新型コロナウイルス感染症と歩むことになるとは予想もできないことでした。医療現場はひっ迫し、心身ともに負担が増加する中でも使命感や責任感を持ち、看護を全うする看護専門職者の方々を目にする度、身の引き締まる思いでした。また、様々な制限がある中での大学生活を通して、主体的に学ぶことはさらなる学修への意欲につながり、探求するおもしろさを実感しました。決して楽しいことばかりの大学生活ではありませんでしたが、一番近くにはいつも仲間がいました。4年前は小さな種だった私たちですが、今は満開の笑顔と花が咲き誇っているように感じます。4月からそれぞれの場所で新たな一步を踏み出すにあたり、宮崎県立看護大学でこの仲間とともに過ごした日々、適切な看護を行うために積み重ねた知識、身につけた技と思考する力は、今後、悩みや戸

惑いが生じた際の後ろ盾となり、また心の支えになると確信しています。その誇りを胸に、世の中がどのような状況にあっても対象の方と真摯に向き合い、私たちが果たすべき役割を追求し、全うできるよう、邁進していきます。

結びにあたり、今日まで熱心にご指導くださった諸先生方、より良い学びの環境を整えてくださった職員の方々、実習を通して様々なことを学ばせてくださった患者様や指導者の皆様、そして、1 番の応援者であり陰ながら支えてくれた家族、ともに助け合った素敵な友人たち、全ての方々に深く感謝申し上げますとともに、本学の今後の益々のご発展と在校生の皆様のご活躍を心よりお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和4年3月16日 第22回卒業生代表 高木萌絵